

令和元年6月16日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02800

研究課題名(和文) 会話データ分析の手法を用いたインターアクション能力育成のための教材開発

研究課題名(英文) Developing Materials for Promoting Interactional Competence Utilizing Conversational Data Analysis Methods

研究代表者

中井 陽子 (NAKAI, YOKO)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・准教授

研究者番号：60398930

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本人学生や日本語学習者がインターアクション能力(言語能力・社会言語能力・社会文化能力)を自律的に高められるようになることを目的に、会話データ分析の手法を学ぶ教材を開発した。そのために、まず、学生が遭遇するであろう会話データ(雑談、体験談、話し合い、インタビュー、誘い等)を収集し、その分析を行い、その成果をまとめた教材を作成した。これに付随して、会話データ分析の変遷・活用法をまとめた教材も開発した。さらに、日本人学生や日本語学習者を対象とした授業において、作成した教材を試用し、受講生がいかにか会話データ分析の視点を獲得して自身のインターアクション能力を向上させたかを検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

会話データの収集・分析を行うことで、基礎研究に基づいた教材作成が行えた。また、これらの会話データの動画と文字化資料を教材化することで、学部生・大学院生の初学者が会話データ分析を実際のデータで行ってみたいことができ、基礎的な会話データ分析の手法を具体的に学びつつ、自身のインターアクション能力の改善を試みることが期待できる。そして、本教材は、アカデミック・ジャパニーズをはじめとする日本語教育や初年次教育のほか、日本語教員養成などの教育内容に活かせることも期待でき、学術的・社会的な価値があると言える。

研究成果の概要(英文)：The authors developed materials designed to assist Japanese students and learners of Japanese in learning about the various methods of conversational data analysis, and thereby autonomously improve their interactional competence (linguistic, socio-linguistic, and socio-cultural competences). First, we collected and analyzed conversational data (e.g., chats, narratives, discussions, interviews, and invitations) which students were likely to encounter in a daily life, and developed materials based on the results of the analysis. We also developed materials addressing changes in and the utilization of conversational data analysis. Subsequently, the developed materials were used in some classes for Japanese students and Japanese language learners. Then, we confirmed that the students acquired a better understanding of the viewpoints of conversational data analysis and raised their interactional competence.

研究分野：日本語教育

キーワード：会話データ分析 インターアクション能力 日本語教育 教材開発

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在、談話分析、会話分析、ディスコース分析等、話し言葉のデータを扱った様々な会話データ分析が行われている。アンケートや内省による意識調査とは異なり、会話データ分析では、録音・録画・文字化した会話データによって、実際の言語・非言語行動が客観的に詳細に記述される。そのため、日常の会話で実際に何が起きているか知り、そこでの人と人のインターアクションがいかに円滑にできるか、その改善方法を知る手法として有効である。こうした社会生活で我々に求められるインターアクション能力とは、言語能力、社会言語能力といったコミュニケーション能力のレベルにとどまらず、日々の生活における行動全般を含むより広い社会文化能力まで想定した社会の実際的なやり取りができる能力のことである(ネウストブニー(2002)「インターアクションと日本語教育」『日本語教育』112号)。

本研究メンバーは、これまで様々な会話データ分析を行い(例:雑談、教室談話の分析)その成果を日本語教育、日本語教員養成・研修の現場へ生かす試みを行ってきた。特に、中井(2008、2009、2010、2012、2015)では、日本語学習者や日本語教師を目指す者が会話データ分析の手法を学び、会話を客観的に分析する視点を獲得して、自律的に自身の会話によるインターアクションを振り返り、改善していく重要性を指摘した。さらに、本研究のメンバーは、学会誌などの文献調査や教育者・研究者へのインタビュー調査をもとに、会話データ分析の手法を用いた研究成果がいかに日本語教育に活かされているかという「研究と実践の連携」の例を収集・分析してきた(平成25~27年度基盤研究(C)「会話データ分析の活用法の研究 - 「研究と実践の連携」のための教員養成用の教材開発 - 」)。

以上の研究の積み上げから、会話データ分析の手法をインターアクション教育に活かす「研究と実践の連携」の有効性が立証できたが、これらは本研究のメンバーらの個別の試みであり、多様な教育現場での共有にはまだ至っていない。インターアクション能力の育成の重要性が高まる現在、以下のような問題点がある。

- (1)言語能力・社会言語能力といったコミュニケーション能力に関する一般書が多く出版されているものの、社会文化能力まで含めたインターアクション能力育成までも視野に入れたものが少ない。また、こうした一般書は、科学的データを根拠にしたものが少なく、個人の体験談の域を出ないものが多い。
- (2)会話データ分析の手法に関する専門書が多く出版されているものの、専門的すぎて専門家以外は理解が困難である。会話データ分析を学んだことがない初学者(例:日本人学生、日本語学習者、日本語教師を目指す者)が段階をおって学んでいける教材がない。

2. 研究の目的

上記の問題点の解決に向け、本研究では、以下の目標を掲げ、研究を行った。

- (1)実際の会話データ分析例を根拠として示しつつ会話データ分析の手法を紹介し、その視点を活かしてインターアクション能力育成ができる教材を開発する。
- (2)(1)で開発途中の試用版教材を用いて、日本人学生や日本語学習者を対象に授業を行い、いかに会話データ分析の視点を獲得して自身のインターアクション能力を向上させたかを検証する。

上記(1)(2)に加え、会話データ分析の変遷と、会話データ分析の研究成果の実践現場への活用法についてまとめた教材を開発・出版し、その教材を用いて行った授業において、学部生・大学院生がどのようなことを学んだかを検証する。本教材の公開によって、今後、日本人学部生を対象とした初年時教育、外国人留学生を対象とした日本語教育、および、日本語教員養成の現場において広く利用できることを目指す。

3. 研究の方法

本教材を作成するために、以下のような手順で、会話データ収集・分析を行い、教材の試用版を作成する。そして、その試用版を実際の授業で使用し、その成果を実践研究として公開する。これをもとに、教材を精査し、出版を行う。

【会話データ収集・分析】

- ・主に、日本人学生・留学生が大学内やアルバイトなどで参加する会話を想定し(例:雑談、話し合い、誘い、キャンパス探検、授業、メディア)その会話データを収集する。収集した会話データは、分析できるように、文字化する。
- ・文字化した会話データを具体的にどのように分析できるのかを教材中で示すため、実際に会話データにおいてどのようなインターアクションが行われていたかについて分析を行う。その上で、その分析例を教材用にかみ砕いて分かりやすく提示できるように編集する。

【教材の試用版の作成と授業の実施】

- ・教材の試用版を作成する。
- ・作成した試用版を実際の授業で使用し、学生の反応から教材分析を行い、改良を加える。

【会話データ分析の手法を学ぶ教材の作成と公開】

- ・試用版を使用した授業の有効性を検証する実践研究を行い、教材を改良する。
- ・会話データ分析の手法を学ぶ教材の出版に向けて出版社と打ち合わせを行う。

【会話データ分析の変遷・活用法の教材開発・試用・分析】

- ・会話データ分析の変遷と、会話データ分析の研究成果の実践現場への活用法について調査し

た結果を教材としてまとめ、出版する。その教材を用いて行った授業において、学部生・大学院生がどのようなことを学んだかを検証する。

4. 研究成果

【会話データ収集・分析】

- ・会話データ（初対面の2者会話の雑談、初対面の3者会話の雑談、体験談の4者会話、体験談のスピーチ、会話の話し合い、留学の意義の発表、ロールプレイ（誘い、依頼、励まし、申し出、挨拶の会話）、インタビュー会話、対談、話し合い、ピアリーディング活動、面接の会話）の収集を行った。これらの会話は、日本人学生や留学生が大学生活の中で参加する会話を想定して収集した。収集した会話データは全て文字化を行った。また、会話撮影後、各会話参加者と会話撮影ビデオを見ながら、会話の際、何を感じ、何を考えていたかを問うフォローアップインタビューを個別に行い、会話参加者の意識を明らかにした。
- ・上記の収集した会話データをもとに、次の会話データ分析を行った。(1)体験談の4者会話、体験談のスピーチ、会話の話し合いの3つの会話での参加者の配慮の仕方と会話で必要とされる会話能力の違いを比較した。(2)誘いの会話における言いさし発話の分析を行った。(3)誘いの会話における言いさし発話の分析を行った。(4)誘いの会話の構造展開における駆け引きの分析を行った。(5)初対面会話（2者・3者会話）における話題開始と情報交換の方法の変化の分析を行った。(6)日本人学部生によるインタビュー会話について、印象評価・会話データ分析・フォローアップインタビューをもとに、比較分析を行った。(7)ピアリーディング活動の会話の分析を行った。

【教材の試用版の作成と授業の実施】

収集した会話データとその分析結果をもとに、会話データ分析（例：雑談、誘い・断り、依頼・承諾、体験談・スピーチ・話し合い、インタビューの会話等）のための教材を作成した。

【会話データ分析の手法を学ぶ教材の作成と公開】

開発した教材を学部の授業で試用し、受講者の学びについて分析を行った。その結果、これらの会話データの動画と文字化資料を教材化することで、学部生の初学者が会話データ分析を実際のデータで行ってみるにより、基礎的な会話データ分析の手法を具体的に学びつつ、自身のインターアクション能力を振り返り、改善する視点を得ていたことが明らかになった。さらに、収集した雑談の会話データをもとに、授業活動の一環で、受講生に対して話題区分調査を行い、その結果を分析した。そこから、教材と授業活動の改善点を探った。以上の結果をもとに、教材を精査し、出版に向けた準備を行った。

【会話データ分析の変遷・活用法の教材開発・試用・分析】

会話データ分析の変遷と活用法を学ぶための教材を出版し、これについてのワークショップ、パネル発表、論文作成を行った。本教材の教育効果の検証により、学部生・大学院生が会話データ分析の変遷と活用法も念頭に入れて、会話データ分析の手法を総合的に学ぶことが可能になることが分かった。そして、会話データ分析の手法、および、変遷・活用法についての教材2編により、総合的な教材開発・教材活用の重要性が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計10件)

1. 中井陽子・宮崎七湖(2019)「熟練した日本語教育者・研究者の語りからの学部生・大学院生の学びの分析 日本語教育人材に求められる資質・能力における「態度」の養成に着目して」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』第17号 大学日本語教員養成課程研究協議会 18-38頁。(査読有)
<https://daiyokyo.files.wordpress.com/2019/03/02e5a4a7e9a48ae58d94e8ab96e99b86efbc88e4b8ade4ba95e383bbe5aeaeefa891efbc89.pdf>
2. 中井陽子・寅丸真澄・大場美和子(2019)「第42回研究大会ワークショップ報告書 会話データ分析の教育者・研究者による語りから広げる研究と実践の視野 グループ・ディスカッションを通して」『社会言語科学』21-2, 社会言語科学会, 79-85頁。(査読無)
3. 中井陽子(2018)「会話データ分析の手法を学ぶための授業実践 学部生の学びの分析からの考察」『東京外国語大学論集』no.97 東京外国語大学 203-225頁。(査読無)
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/92837>
4. 中井陽子・大場美和子・尹智鉉(2018)「『文献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析の広がり軌跡 - 研究から実践まで』の教材としての特徴 - 開発プロセスと作成の意義 -」『日本語教育研究』第44輯 韓国日語教育学会 77-92頁。(査読有)
http://www.kaje.or.kr/html/sub04_01.asp
5. 中井陽子(2018)「インタビュー会話の分析活動から学ぶより良いインタビューの方法 会話データ分析の手法を学ぶ学部授業での実践をもとに」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10号 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会 36-44頁。(査読無)
<http://academicjapanese.jp/dl/ajj/ajj10.36-44.pdf>
6. 中井陽子・寅丸真澄・大場美和子・増田将伸(2018)「第40回研究大会ワークショップ報告書 会話データ分析の「研究と実践の連携」の可能性を探る - その変遷と教育者・研究者に

- よる具体的試みを基に - 』『社会言語科学』20-2 (企画責任者) 社会言語科学会 46-51 頁.
(査読無)
7. 中井陽子 (2017) 「誘いの会話の構造展開における駆け引きの分析 - 日本語母語話者同士の断りのロールプレイとフォローアップ・インタビューをもとに - 』『東京外国語大学論集』no.95 東京外国語大学 105-125 頁. (査読無)
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/89930>
 8. 中井陽子 (2017) 「会話の種類による参加者の配慮の違い 体験談の会話・スピーチ・話し合いの分析をもとに 』『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』9 号 アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会 46-54 頁. (査読無)
<http://academicjapanese.jp/dl/ajj/ajj9.46-54+.pdf>
 9. ウィモンサラウォン, アパポーン・中井陽子 (2017) 「誘いの会話における言いさし発話の分析 - 日本語母語話者によるロールプレイをもとに - 』『日本語教育研究』第 40 輯 韓国日本語教育学会 141-160 頁. (査読有)
http://www.kaje.or.kr/html/sub04_01.asp
 10. 中井陽子・高田光嗣 (2017) 「大学院の授業における「研究と実践の連携」を考える機会の試み - ピアラーディング活動を通じた学び - 』『日本語教育研究』第 40 輯 韓国日本語教育学会 63-81 頁. (査読有)
http://www.kaje.or.kr/html/sub04_01.asp

[学会発表](計 14 件)

1. 中井陽子 (2019) 「日本人学部生によるインタビュー会話の比較分析 - 印象評価・会話データ分析・フォローアップインタビューをもとに - 』(ポスター発表), 第 43 回社会言語科学会研究大会, 2018 年 3 月 17 日, 於・筑波大学 (茨城).
2. 中井陽子・大場美和子・寅丸真澄・蒙 韞 (2019) 「会話データ分析をどのように行うのか - 実際と展望 - 』(企画責任者), 東京外国語大学 2018 年 (平成 30 年) 度大学院国際日本学研究院長教育経費, 2018 年 2 月 1 日, 於・東京外国語大学 (東京).
3. 大場美和子 (2018) 「初対面会話における話題開始と情報交換の方法の変化の分析 二者・三者会話の基軸参加者に着目して 』2018 年度日本語教育学会秋季大会, 2018 年 11 月 25 日, プラザヴェルデ
4. 中井陽子・大場美和子・寅丸真澄 (2018) 「会話データ分析の教育者・研究者による語りから広げる研究と実践の視野 - グループ・ディスカッションを通して - 』(ワークショップ企画責任者), 社会言語科学会第 42 回大会, 2017 年 9 月 17 日, 於・広島大学 (広島).
5. 中井陽子 (2018) 「会話データ分析の手法を学ぶための教材開発 - 学部授業における試用の分析からの考察 - 』2018 年日本語教育国際研究大会 / 第 22 回 AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, 2018 年 8 月 4 日, 於・ヴェネツィア大学 (ヴェネツィア).
6. 中井陽子・大場美和子・尹智鉉 (2018) 「『文献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析の広がり軌跡 - 研究から実践まで』の教材的な特徴 - 開発プロセスと作成の意義 - 』韓国日本語教育学会 2018 年度 第 33 回 国際学術大会, 2018 年 4 月 28 日, 於・建国大学校 (ソウル).
7. 大場美和子 (2018) 「会話データ分析の文献調査のプロセス - 基礎調査から教材開発まで - 』韓国日本語教育学会 2018 年度 第 33 回 国際学術大会, 2018 年 4 月 28 日, 於・建国大学校 (ソウル).
8. 尹智鉉 (2018) 「韓国における日本語の教育者・研究者の語りから学ぶための教材開発」韓国日本語教育学会 2018 年度 第 33 回 国際学術大会, 2018 年 4 月 28 日, 於・建国大学校 (ソウル).
9. 中井陽子 (2018) 「韓国の教育者・研究者の語りからの学び - 日本の学部・大学院生のレポートの分析から - 』韓国日本語教育学会 2018 年度 第 33 回 国際学術大会, 2018 年 4 月 28 日, 於・建国大学校 (ソウル).
10. 大場美和子・中井陽子 (2018) 「会話データ分析の初学者による話題区分の特徴の分析 - 分析手法の指導に向けて - 』(ポスター発表), 第 41 回社会言語科学会研究大会, 2018 年 3 月 11 日, 於・東洋大学 (東京).
11. 中井陽子・大場美和子・宮崎七湖・尹智鉉 (2017) 「日米豪韓における「会話データ分析」の研究成果と教育現場への活かし方を探る 文献調査とインタビュー調査をもとに 』(パネル企画責任者), 日本語教育学会秋季大会, 2017 年 11 月 25 日, 於・朱鷺メッセ (新潟).
12. 中井陽子・寅丸真澄・大場美和子・増田将伸 (2017) 「会話データ分析の「研究と実践の連携」の可能性を探る - その変遷と教育者・研究者による具体的試みを基に - 』(ワークショップ企画責任者), 社会言語科学会第 40 回大会, 2017 年 9 月 17 日, 於・関西大学 (大阪).
13. アパポーン, ウィモンサラウォン・中井陽子 (2017) 「誘いの会話における言いさし発話 - 日本語母語話者によるロールプレイの分析をもとに - 』(口頭発表) 韓国日本語教育学会 2017 年度春季 (第 31 回) 国際学術大会, 2017 年 4 月 29 日, 於・建国大学校 (ソウル).
14. 中井陽子・高田光嗣 (2017) 「大学院の授業における「研究と実践の連携」を考える機会

の試み - ピアリーディング活動を通じた学び - 」(口頭発表)韓国日語教育学会 2017 年度
春季(第 31 回)国際学術大会, 2017 年 4 月 29 日, 於・建国大学校(ソウル)。

〔図書〕(計 2 件)

1. (中井陽子)・(寅丸真澄)・(大場美和子)・
(増田将伸)(2018)「
が (会話デ
ータ分析の「研究と実践の連携」の可能性を探る - その変遷と教育者・研究者による具体
的試みを基に -)」(延世大学言語情報研究院編)『韓中日の言
語を通じて探ってみた三国の社会と文化(
Societies and Cultures of Korea, China, and Japan Reflected on Their Languages)』
(韓国文化社) 259-286 頁。
2. 中井陽子(編著)大場美和子・寅丸真澄・増田将伸・宮崎七湖・尹智鉉(著)(2017)『文
献・インタビュー調査から学ぶ会話データ分析の広がり軌跡 - 研究から実践まで - 』ナ
カニシヤ出版 全 264 頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ynakai/index.htm>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名: 大場 美和子

ローマ字氏名: OHBA, Miwako

所属研究機関名: 昭和女子大学

部局名: 文学研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 50454872

研究分担者氏名: 寅丸 真澄

ローマ字氏名: TORAMARU, Masumi

所属研究機関名: 早稲田大学

部局名: 日本語教育研究センター

職名: 准教授(任期付き)

研究者番号(8桁): 60759314

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。